

伊波普猷文庫『遺老説伝』四冊本の装幀と料紙について

前村 佳幸・小島 浩之

はじめに

伊波普猷文庫とは、1955年に琉球大学が伊波普猷（1876～1947）の旧蔵資料106部161冊を冬子夫人より購入し、琉球大学附属図書館内に設けたコレクションである。内容としては、沖縄県尋常中学校の恩師田島利三郎（1869～1931）や真境名安興（1875～1933）から譲渡された資料が中心である。田島が書写した古謡集『おもろさうし』（田島本）のほかに、『おもろさうし』（仲吉本）全22巻の写本、慶長年間の『喜安日記』写本、首里宮中のことばを和文で説明する『混効験集』の写本など、多様な資料が含まれている。これらの資料は、伊波が大正14年（1925）2月に東京に転居した際に沖縄から持ち出されたのであるが、入手の経緯が不明なものもある。

その一つが『遺老説伝』である。『遺老説伝』三巻附巻は18世紀前半に成立した史書『球陽』の外巻として編纂されたものであり、各地から提出された候文の「旧記」を基に漢文化した説話集である。伊波普猷文庫には2種類あり、一方の三冊本は欠本ではあるが、ほぼ全葉にある押印が士族の系図と史書の編纂を司った系図座の公印とみられ、さらに表紙から摘出された文書の内容が宗門改めであることから、首里の官本からの写本と考えられる¹⁾。

本稿で主に検討する資料、『遺老説伝』四冊本（伊波普猷文庫 No.14-1～3, 4E）は完本であり、朱の句読点が施され、柳田國男の『諸国叢書』における『遺老説伝 補遺』の底本になっている。また、東京で刊行された島袋盛敏訳（書き下し）『球陽外巻 遺老説伝』（学芸社、1935）では、扉

の次に原本として巻1第59葉の写真が掲載されており、その虫損の形状が四冊本と一致している。この四冊本には、これまでに修復された形跡がなく、変色、欠損、キレツ、水ぬれによるシミ、カビ、汚損、シワ等の劣化が複合的に見られた。さらには、袋綴じの本紙のほぼ全葉に新聞紙が間紙として綴じられており、劣化部分の補修と、酸性紙である新聞紙の除去を早急に進める必要があった。

今回、琉球大学附属図書館の委託を受けた紙修復保存工房（那覇市首里崎山町）における修復作業にともない、本資料に対する調査を行うことができた（2013年8月26・27日実施）。その主たる目的は、本紙の裏や間紙、表紙の芯に史料となる文字資料が存在するのかどうかを確認することであった。また、伊波が本資料を入手した経緯について情報を得ることも課題としていた。この点については、間紙であった新聞紙により、最後に装幀された時期が推測できたが²⁾、本稿では、装幀と料紙の特徴を明らかにすることを通して、その補足を試みたい。

1. 装幀の特徴

本資料は60年もの間、貴重書として保管されてきたが、酸性の新聞紙と接触していることによる劣化が懸念されてきた。修復においては、クリーニングの上、虫損など欠損部は竹紙繊維（中国福建省産）を利用した漉き嵌めにより補修し、典具帖紙（高知産）による最小限の裏打ち、ブックキーパー法による脱酸化処理がなされた³⁾。全4冊267枚の料紙構成は表1の通りである。

表 1 琉球大学附属図書館蔵伊波普猷文庫 No. 14『遺老説伝』の料紙

部位	遺老説傳 卷 1	遺老説傳 卷 2	遺老説傳 卷 3	遺老説傳 外附巻
表・裏表紙	2 枚	2 枚	2 枚	2 枚
表・裏遊裏紙	2 枚	2 枚	2 枚	2 枚
本紙	47 枚	35 枚	25 枚	11 枚
表・裏遊び紙	2 枚	2 枚	2 枚	2 枚
袋綴じ中の 間紙	53 枚 (新聞紙 48 枚)	36 枚 (新聞紙 35 枚)	25 枚 (全て新聞紙)	11 枚 (全て新聞紙)
合計	106 枚	77 枚	56 枚	28 枚



写真 1-1

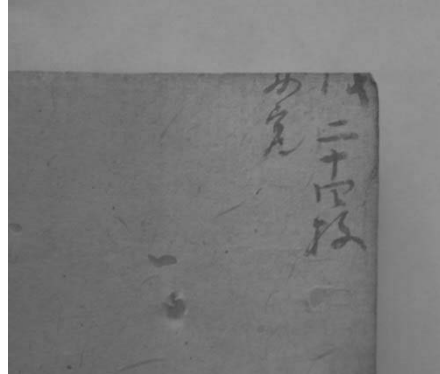


写真 1-2

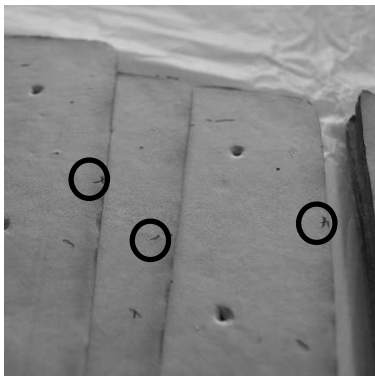


写真 1-3

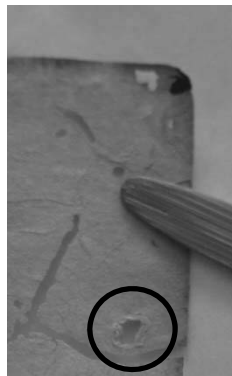


写真 1-4

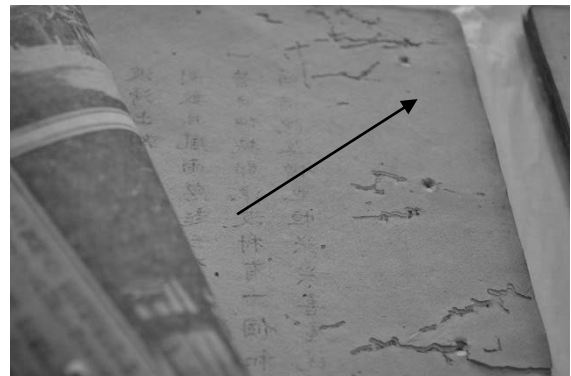


写真 1-5

なお、文字資料として認識できる間紙は大正期の新聞紙のみであり、本紙の裏に文書や書き込みは見出せなかった。その他には、第 1 冊に洋紙 2 枚と半紙 1 枚、第 1 冊と 2 冊の扉にそれぞれ本紙 2 枚（白紙）、本紙 1 枚（白紙）が重ねて綴じられていた。写真 1-1 に示す 4 孔は本紙と新聞紙を綴じていたものである。ただし、一部の天に朱書があり（写真 1-2 では「二十四枚」などと判読）、上小口（天辺：天の余白部分）が裁断されている。第 1 冊第 17 葉から第 28 葉では、綴孔の内側の余白に通し番号のような漢数字が

左半分確認され（写真 1-3 では左から「七」「八」「九」と判読）、ノドが天から地にかけて裁断されていたことがわかる。このことから、この本は少なくとも過去に一度は改装されていることが指摘できる。

さらに、綴孔の内側に現在の綴孔とは別に天から 2.9cm・綴幅 0.7cm、地から 2.8cm・綴幅 0.7cm のあたりに 2 孔あり（写真 1-4 円部分、第 2 冊第 4 葉）、より古い綴孔だと考えられる。ここには圧痕ではなく、けば立ちが見られるため（特に第 2 冊第 2・第 3 葉）、糸ではなく紙こよりの類

で綴じてあったことが推測される。

以上により、書写と最終の装幀は別の時期に行われていたことが確認される。

本紙については、随所に白色長方形の付箋紙（写真 1-1 本文右 2 行上）と、色紙をちぎった不審紙（桃色、灰色）が貼り付けられており、句読点や傍線を施した際に生じたとみられる朱移りも散見され、所有者がかなり自由に取り扱っていたことが窺える。今回の修復により、これらの付箋紙は和紙で裏面を補強の上、もとの場所に貼り直された。不審紙についても位置が判明したものは、もとの位置に戻された。

本紙の刷毛目は袋綴じの裏側で、矢印方向に確認できた（写真 1-5）。刷毛目のある側は非書記面となることが多いので、紙の物理的表裏という点から言えば一般的な使い方をしていといえる。さらに、簀目・糸目から料紙を観察すると、写真 1-6 に示すように、本紙において糸目が横方向に走っており、料紙が逆使いされている。通常、料紙は糸目方向に裁断して冊子にするため、糸目は縦方向に、簀目は横方向に表れる。

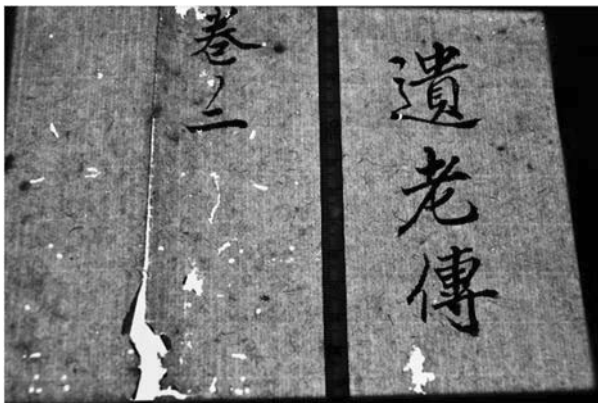


写真 1-6

和紙の表面に対し横から反射光を当て顕微鏡で観察すると、繊維が縦方向に並んでいることが明瞭に確認できる。このような用紙を逆使いすると、横方向に強度があるので、頁はめくりにくく、一度開いた面が閉じやすくなる。ただし、

この特性は、繊維の短い竹紙の場合、和紙ほど顕著ではないという。和紙では、流し漉きにより、長い繊維が縦方向に流れて縦の強度が増しているからである（大川昭典氏のご教示による）。

琉球典籍における逆使いの例としては、尚家文書七冊本『球陽』（那覇市歴史博物館蔵）や蔡温本『中山世譜』（沖縄県立博物館・美術館蔵）を挙げることができる。逆使いした理由としては、料紙をできるだけ有効に取るためであったと思われる。

表紙の特徴としては、加工紙に丁子引きと組み合わせて柿渋で柄がつけられており、「沖縄図書館蔵」と篆字でエンボス（型押）加工されている（写真 1-7）。



写真 1-7

この装幀に関しては、伊波普猷文庫 No.83 『琉球館訳語』の表紙と類似しており、注目される。『琉球館訳語』では、裏表紙を裏に折り込んだ部分と裏紙との間に「大正十三年十一月橋本進吉君よりおくらる」と墨書されている。この年はまさに伊波が沖縄県立沖縄図書館の館長を辞任して上京する前年（1924）である。そして、この本を贈呈したのは言語学・国語学の泰斗で東京帝国大学教授の橋本進吉（1882～1945）であろう⁴⁾。

なお、『琉球館訳語』の書尾には原稿用紙が綴じられているが、明治 41 年（1908）の中国本土の調査旅行について記述されているので、伊波自身による文章ではない。裏表紙の裏紙には、その一文が転記されているが、筆跡は原稿用紙のそれと異なっているようであり、橋本から受け取った資料を伊波の方で装幀したことが推測される。これにより、『琉球館訳語』の墨書は、東

京帝大助手時代の橋本進吉との交流を示す証左であると同時に、類似する表紙の『遺老説伝』四冊本が最後に装幀された時期を示唆するものといえよう⁵⁾。

さらに、四冊本にせよ三冊本にせよ伊波普猷文庫の『遺老説伝』には、沖縄図書館の蔵書印やその消跡は認められない。このような点を考慮に入れると、表紙に「沖縄図書館蔵」と型押しされた『遺老説伝』四冊本についても、その蔵書が私物化されたというようなことは考えにくいのである。

再び『遺老説伝』の表紙について述べると、その表・裏表紙の裏紙は接着剤により変色しており、その紙質は保存に適さないと判断され交換した。この紙は次章に示す繊維分析によっても近代の用紙であることが確認されている。

以上のことから、『遺老説伝』四冊本の最終的な装幀は伊波普猷が沖縄図書館館長を辞任して東京に移転する前年の大正13年中(1924)にな

されたとみられる。

2. 料紙の種類

修復作業を控え一枚ずつ広げられた料紙に対しては、透過光や反射光により簀目・糸目や刷毛目跡・板目跡などを観察し、法量を測定した。表2中の扉紙は、写真1-6に示すように墨書され本紙と同一の料紙である。表2によれば、第1冊から第4冊までの本紙と扉紙については、糸目幅が一定でないことを除けば、特性はおおむね共通しているようである。

さらに、ごく微量の範囲で採取できた4紙片により、高知県立紙産業技術センターにおいて、C染色液⁶⁾による繊維の呈色反応を確認した(2013年11月26日～29日)。これにより、この本は部所により異なる料紙で構成されていることが判明した。以下、大川昭典氏(元高知県立紙産業技術センター技術部長)による所見を示す。

表2 琉球大学附属図書館蔵伊波普猷文庫 No.14『遺老説伝』の料紙調査表

	巻1扉紙 (虫損頭著)	巻1本紙 第13葉	巻1本紙 第23葉	巻2見返し	巻2扉紙	巻2本紙 第1葉
寸法 (cm)	23.7×39.3	23.7×39.7	23.7×40	23.6×39.5	23.7×39.5	23.6×39.5
重量 (g)	2.0	2.4	2.5	3.0	2.0	2.3
坪量 (g/m ²)	21.3	25.5	26.4	32.1	21.2	24.7
厚み (mm)	0.071	0.073	0.074	0.078	0.058	0.069
密度 (g/cm ³)	0.30	0.35	0.36	0.41	0.37	0.36
簀目 (本/3cm)	24		27	36	27	27
糸目幅 (mm)	16		12	29	16	16

	巻3見返し	巻3扉紙	巻3本紙 第1葉	外附巻 見返し	外附巻 扉紙	外附巻本紙 第1葉
寸法 (cm)	23.6×39.5	23.4×39.5	23.4×39.5	23.5×39.4	23.5×39.6	23.5×39.7
重量 (g)	3.0	2.0	2.4	2.9	2.1	2.6
坪量 (g/m ²)	32.2	21.6	26.0	35.1	22.6	27.9
厚み (mm)	0.075	0.058	0.070	0.075	0.058	0.071
密度 (g/cm ³)	0.43	0.37	0.37	0.47	0.39	0.39
簀目 (本/3cm)	39	27	27	36	27	27
糸目幅 (mm)	30	12	12	30	16	18

(測定:2013年8月26日 柳原、小島、大川)

① 巻1(第1冊)裏表紙遊び紙(第47葉綴穴から採取)

未染色の状態(写真2-1)にて観察される幅の広い繊維はイネの表皮細胞である。染色した試料では木材繊維、細いイネの繊維に加えてオリブ色を呈したミツマタの繊維(矢印)が観察される(写真2-2)。最も幅広の繊維は木材繊維である。

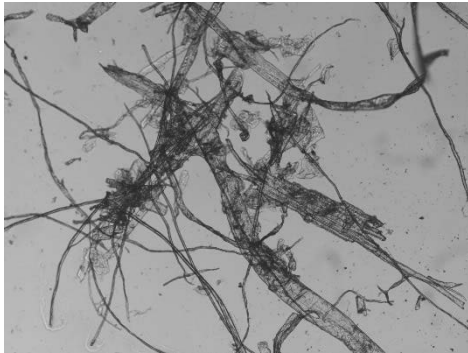


写真2-1 (100倍撮影画像を1/2に縮小)



写真2-2 (100倍撮影画像を1/2に縮小)

写真2-3 中央左下、左上から右下に至る、幅の広い一本の繊維が木材繊維で、イネの繊維(矢印)は最も細くて青く呈色している。中央部の青い塊はイネ科の表皮細胞束で、その下の小さくて青い両刃のノコギリ状をしたものは、表皮細胞束から外れた表皮細胞である。

この木材繊維は、針葉樹から化学的に製造されたものである。ソーダ法(AP)のパルプは1852年にイギリスで発明され、日本では明治29年(1896)に土佐の製紙業者中内丈太郎が10トン余りを神戸で契約して輸入したのが、最初の導

入記録である⁷⁾。

これにより、この紙が、明治30年(1897)以降に製造されたものであることは明白である。さらに、この配合からすると、我が国で半紙として作られたものと考えられる。

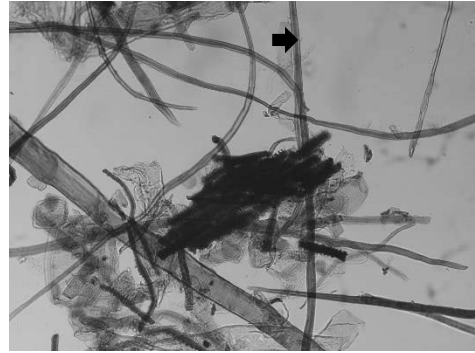


写真2-3 (200倍撮影画像を1/2に縮小)

② 巻1(第1冊)本紙:第6葉(紙片より採取)

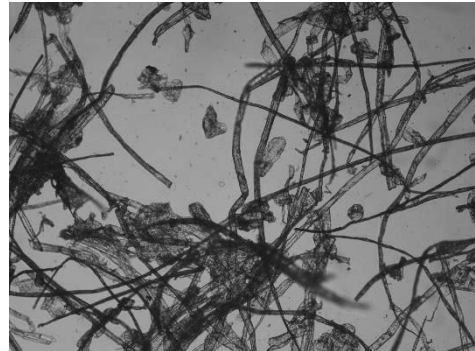


写真2-4 (100倍撮影画像を1/2に縮小)

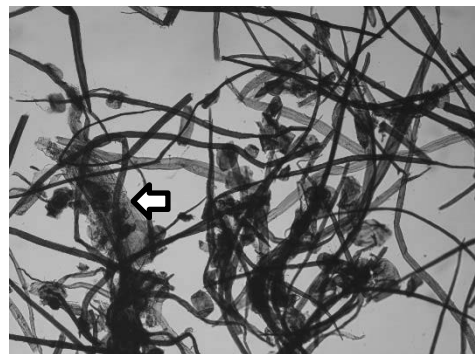


写真2-5 (100倍撮影画像を1/2に縮小)

竹の繊維が観察される。繊維は短くて幅広の透明感のあるものと不透明な丸さのあるものがある(写真2-4)。また、C染色液で染色すると

繊維は青く呈色し、俵状の薄壁細胞や黄色に呈色し幅広の網目状になった網紋導管も観察される(写真 2-5 矢印)。竹 100%の紙は我が国では殆ど製造されておらず、浙江省や福建省あたりで造られた中国産紙と思われる。

③ 巻 2 (第 2 冊) 表紙 (折り返しから採取)

表紙は主にコウゾで構成され、他に木材繊維、イネ科の繊維も観察される。コウゾの繊維は長くて薄膜に覆われ、所々に節状部があり(写真 2-6 矢印)、先端が薄膜だけのものもある(写真 2-6 円部分)。C 染色液で染色すると赤味を呈する(写真 2-7)。

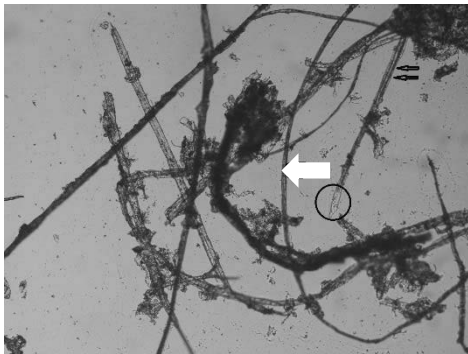


写真 2-6 (100 倍撮影画像を 1/2 に縮小)

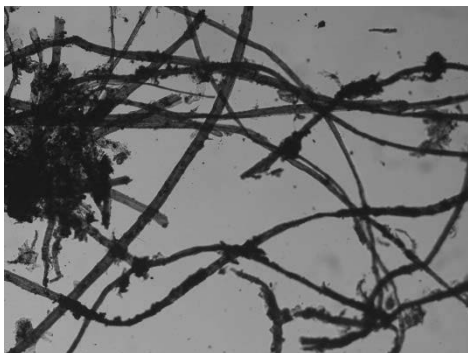


写真 2-7 (100 倍撮影画像を 1/2 に縮小)

写真 2-8 と 2-9 には幅広の針葉樹の木材繊維(化学的に造られたパルプ CP)が観察され、また黄色に呈色した繊維(写真 2-8 矢印、写真 2-9 矢印)は機械的に造られた針葉樹のパルプ(GP)である。

写真 2-9 中央の黄色の固まり(GP)の中で青

く呈色した繊維(白抜矢印)はイネ科の繊維であり、イネの繊維よりも大きいので竹の繊維である可能性もある。

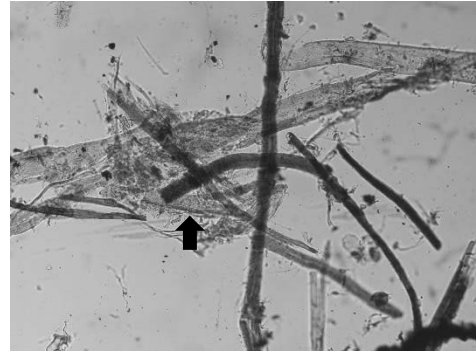


写真 2-8 (200 倍撮影画像を 1/2 に縮小)

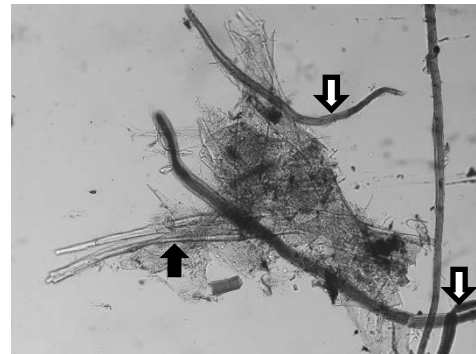


写真 2-9 (200 倍撮影画像を 1/2 に縮小)

写真 2-7 で確認できるコウゾの繊維に付着する青黒い固まりは、澱粉糊である。表紙裏の折り返しから繊維を採取したので折り返しの接着に用いたものと思われる。

この表紙には型押しがされていて、表面にはデザインされた凹凸模様がある。型押しして凹凸模様を付けるには、新しい原料から作った紙では凹凸が伸びて付けにくく、むしろ古紙を使用した方が正確な凹凸ができる。これにより再生紙を用いるのが一般的である。明治時代の型押しされた壁紙や和本の表紙にも再生紙が用いられている。繊維の傷んでいる状態や 2 種類の製法の異なる木材繊維の配合、イネ科の繊維も観察されることから、この表紙もコウゾを主体とする再生紙が用いられたと考えられる。

④ 巻2(第2冊)本紙:第19葉(下の綴孔からの紙片)

竹の繊維が確認される(写真2-10)。さらに、染色した試料では、青い竹の繊維と茶色を呈する竹の網紋導管(矢印)のコントラストが明瞭である(写真2-11)。これは竹のみの半紙(毛辺紙)からの試料(写真2-12・2-13)と比較しても同様に確認することができる。

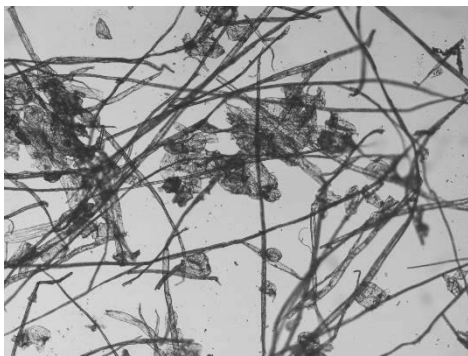


写真2-10 (100倍撮影画像を1/2に縮小)



写真2-11 (100倍撮影画像を1/2に縮小)



写真2-12 (100倍撮影画像を1/2に縮小)



写真2-13 (100倍撮影画像を1/2に縮小)

以上に明らかなように、表紙には近代の素材が含まれた漉返紙が使用されている。他方において、薄い黄土色の本紙は、表2で示される通り、紙の特性がおおむね共通しており、用紙が竹紙であることの証左となるだろう。先述の通り、竹紙は主に中国南部で抄造され、日本国内に産地はない。福建で製法を習得した琉球人を召し抱え、薩摩人に伝習させて抄造し、大阪で売りさばこうとした薩摩藩の試みも成功しなかった⁸⁾。それでは、書写の時期はいつだろうか。

竹紙は近世琉球において重んぜられ、辞令書のような重要文書はもとより⁹⁾、士族身分の要件である家譜においても同様である¹⁰⁾。典籍類でも、蔡鐸本『中山世譜』(沖縄県立博物館・美術館蔵)や尚家本『球陽』(那覇市歴史博物館蔵)の料紙が竹紙であることを確認している。こうした事実に鑑みると、この本は中国とりわけ福建省と直接交易していた首里王府時代に遡るやや古い写本であるように思われる。

3. 『遺老説伝』四冊本の資料的価値

今回、当該資料以外の『遺老説伝』に対しても調査を行った。修復済みの『遺老説伝』三冊本については、顕微鏡(PEAK: No.2034-100)による繊維観察によると、本紙は竹紙と判断される。さらに、修復の際に表紙から摘出された芯紙については、その内容は行政文書であり、原料はアオ

ガンピ(ジンチョウゲ科)とコウゾ(現在の沖縄ではカジノキが自生)の2種類である。

アオガンピ製の文書の内容は宗門改書であり、宮古島固有の人名が見られる¹¹⁾。コウゾ製の紙には「切支丹宗門御改所 美里按司」との署名があり、首里で作成されたとみられる。このことから、宮古から発送された文書を首里で取りまとめたものが反古紙となり、芯紙として三冊本の装幀に使用されたと考えられる。

なお、先島地方において公用に供するため抄造されたのは、コウゾを原料とする百田紙・杉原紙とされており、アオガンピについては抄造関連の史料がなく、アオガンピ製の最古の文書の作成時期は王府末期の同治年間(1862~1874)とされ、これまでに実物が確認されているのは八重山地区のみである¹²⁾。そのため、宮古地区で作成されたとみられる文書にアオガンピを原料とした紙が使用されていた点は注目に値する。

このように、装幀に使用された反古紙が王府時代の文書に由来することは确实だが¹³⁾、反古紙と本紙への書写および装幀は、それぞれ年代が異なる可能性を勘案すると、成立年代を確定することはなお困難と言わざるを得ない。

さらに、琉球大学附属図書館には、「光緒8年(1882)に石垣島の名家松茂氏によって書写されたことが明記されている一冊綴の『遺老説伝』(宮良殿内文庫)がある。書写年と書写者の姓名・花押が見られる珍しい事例であるが、底本については言及されていない。料紙については、所蔵先の史料カードには「楮紙」と記入されているが、紙面に対する顕微鏡観察の所見では切断されたアオガンピ製の紙片も入った混合紙と判断される。本紙の劣化度は低いようであるが、綴紐が緩んでおり、表には題字がなく本来の表紙が欠けていると見られる。なお、裏表紙の芯紙には行政文書が使用されている。このように、一部修復の

必要性が見出されるので、その際に既に本紙から分離している紙片を採取することができれば、C 染色液による紙の繊維の呈色反応分析などを行うことが期待される。

国宝に一括指定された尚家文書(那覇市歴史博物館蔵)中の『遺老説伝』については、複製本を見る限り、一冊本であり秘蔵本であることを示す印影もなく、比較的新しいテキストであると想定していたが、その本紙は竹紙であった。そして、表紙がコウゾ系であることは、尚家文書の『球陽』と共通する点である。

これまでの所見によれば、本稿で主に検討した『遺老説伝』四冊本は、完本でありながら奥付類がなく、不完全本とはいえ王府による公印がある三冊本以上に来歴を考究することが困難なテキストである。しかも、新聞紙が綴じられていたことから、伊波当人の参照用の本であるかのような印象すら受けてしまう。それでも、本紙が「藁紙」ではなく¹⁴⁾、「竹紙」であることからすると、その書写は首里王府時代に遡ると考えられ、重要な校本の一つとして位置づけられる。

おわりに

古典籍・古文書の修復により、裏打ちなどが施されると、その料紙の厚みや重量などの正確な計測は困難な状態となる。そのため、繊維観察を行い、修復の前に紙片を採取できるのであれば、これを試料として繊維の分析を行い、それらの情報を整理していくことが望まれる。研究者が修復にともなう一度限りの分解の機会を利用して料紙や装幀について調査を行うことはきわめて重要ではないだろうか。伊波普猷文庫のほとんどの資料はデジタルアーカイブ化されウェブ上で公開されているけれども、現物の保存には難題を抱えている。つまり、新聞紙などを間紙として綴じ込んだ状態の資料がなお存在しており、

No.33『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』(「同治14年」1875)、No.45『おもろさうし』(仲吉本：昭和9年尚家本校合済。島袋源一郎宛書簡あり)、No.54『口説集 附琉歌集』、No.61『念仏集』(同治11年：1872写)、No.70『琉歌集』(田港朝春写)、No.71『琉歌集』、No.72『琉歌集』(冬の部)、No.73『琉歌集—琉球百控乾柔節流』、No.86『配流余材』、No.87『受剣石』など貴重な資料ばかりである。同様の状況が沖縄県内の公共機関および民間所蔵の資料についても十分想定される。今後、それらの分布や劣化度などの実態を把握し、その対応に向けて所蔵機関と研究

者の連携を推進していく必要がある。

【謝辞】本稿における調査は、大川昭典氏(元高知県立紙産業技術センター技術部長)ならびに柳原敏昭教授(東北大学文学研究科)の指導助言を受けて行われた。両氏にお礼申し上げます。

本稿は、JSPS 科研費(課題番号 25370783)の助成による研究成果の一部である。

(まえむら よしゆき：琉球大学教育学部准教授)

(こじま ひろゆき：東京大学大学院経済学研究科講師)

- 1) 前村佳幸「球陽外巻『遺老説伝』底本の探究」『琉球大学教育学部紀要』第82集, 2013.3。
 2) 前村佳幸「伊波普猷文庫『遺老説伝』四冊本から抽出された新聞紙について」『琉球大学教育学部紀要』第85集, 2014.8。
 3) 紙修復保存工房の報告によれば、脱酸性化処理前後の料紙 pH の変化は以下の通りである。

測定箇所	処理前 pH	処理後 pH
第1冊 18葉右下 7.0cm	4.13	8.07
第1冊 42葉右下 2.0cm	4.12	7.92
第2冊 14葉右下 4.0cm	4.21	7.97
第2冊 23葉右上 1.0cm	4.08	8.14
第3冊 中表紙(第1葉) 右下 1.5cm	4.73	8.12
第3冊 中表紙(第1葉) 左下 1.5cm	4.52	8.13
第3冊 15葉右下 1.5cm	4.21	7.78
第4冊 表紙綴側下部 1.0cm	5.17	8.14
第4冊 6葉右下 2.0cm	4.18	7.99
第4冊 最終葉(第11葉) 右下 9.0cm	4.13	8.11

(測定機器：HORIBA D-21)

- 4) 橋本と伊波は新村出門下の同窓(言語学専攻)かつ同期(1906年卒業)であり、在学中から「言語学閑話会」などで親睦を深めており、橋本・伊波や金田一京助ら会のメンバーは還暦を期に集まり旧交を温めている。後藤朝太郎「言語学閑話会の思ひ出」『国語と国文学』第22巻第5号(第253号), 1945.5を参照。また、その間、橋本は昭和3年(1928)9月9日付で伊波の『琉球戯曲辞典』(郷土研究社, 1938)に序文を寄せ、伊波は橋本が関与している藤村作(編)『日本文学大辞典』(新潮社, 1932-1935)のために琉球語概観を執筆した。『伊波普猷全集』巻8, 平凡社, 1975の巻末解題を参照。
 5) 綴じられていた新聞紙も大正13年春の日付である。前掲註2)論文参照。
 6) 日本工業規格 JIS P 8120: 1998「紙、板紙及びパルプ-繊維組成試験方法」8.2.2に基づき調整。
 7) 清水泉編著『土佐紙業史』高知県和紙協同組合連合会, 1956, 106頁。
 8) 真栄平房昭「琉球の中国貿易と輸入品：海を越えた唐紙」『一八世紀日本の文化状況と国際環境』笠谷和比古編, 思文閣出版, 2011。
 9) 富田正弘「琉球国発給文書と竹紙」『東京大学史料編纂所研究紀要』第17号, 2007.3。
 10) 琉球家譜を最も多く収蔵する那覇市歴史博物館のご理解により実見することができた。
 11) 豊見山和行氏(琉球大学法文学部教授)のご教示による。
 12) 上江洲敏夫「琉球紙の歴史」『沖縄の紙』安部榮四郎編, 沖縄タイムス社, 1982, 141-142, 154頁。
 13) 成年以降の生死について報告するものであり、琉球処分以前では、明治7年(1874)、中国の同治元年(1862)、道光30年(1850)と遡る。
 14) 前掲註1)論文、66頁。